

VISIT KUMAMOTO

阿蘇くまもと空港情報マガジン[ビジット・クマモト]



2019 SPRING

|特集| 殿様が愛した焼き物

TAKE
FREE
VOL.15

阿蘇くまもと空港
フロアガイド

3F

レストラン

- ① キッチン 空福亭
- ② いきなり!ステーキ
- ③ カレー食堂 肥後咖喱研究所
- ④ 和ダイニング りんどう(和食)
- ⑤ ラーメンダイニング くすのき

4F

展望デッキ

展望デッキ

2F

京浜急行券売機
東京モノレール券売機

4搭乗口

3搭乗口

2F

1F

ひこうき広場

ふれあい広場(2Fホール)

1F

売店

- ① 鶴屋百貨店
- ② あんたがたどこさ熊本空港店
- ③ 熊本空港 香梅庵
- ④ お菓子の香梅
(熊本エアポートサービス)

- ⑤ 旬彩館
- ⑥ ANA FESTA(中央売店)
- ⑦ 熊本エアポートサービス
(中央売店)
- ⑧ BLUE SKY(中央売店)

- ⑨ ANA FESTA(ゲート売店)
- ⑩ BLUE SKY(ゲート売店)

1F

施設

- ① 団体待合室
- ② 特別室A
- ③ 特別室B
- ④ 特別室S
- ⑤ 会議室C
- ⑥ 会議室D

カードラウンジ

- ① ラウンジ「ASO」

カフェ

- ① オープンカフェ

1F

航空会社受付カウンター

- ① ソラシド エア
- ② ANA
- ③ JAL
- ④ AMX
- ⑤ FDA
- ⑥ ジェットスター

バス乗り場

- ② Spot Cafe あそへら

駐車場入口

航空会社受付カウンター

- ① ソラシド エア
- ② ANA
- ③ JAL
- ④ AMX
- ⑤ FDA
- ⑥ ジェットスター

バス乗り場

- ② Spot Cafe あそへら

男子お手洗

女子お手洗

多目的お手洗

オストメイト
対応トイレ

ベビールーム

キッズコーナー

公衆電話

喫煙所

インターネット
コーナー

AED
自動体外式除細動器

エレベーター

コインロッカー

各ATM

郵便ポスト

くまもと無料Wi-Fi
利用可能エリア

2F

3F

4F

1F



焼き物 殿様が愛した



—小代焼—



熊本には400年以上の歴史を守り続ける焼き物があります。代表的なものが八代市や氷川町にある高田焼、荒尾市や南関町を中心に多くの窯元が集まる小代焼です。特徴が異なるこれらの焼き物は、江戸時代に熊本藩の保護により発展しました。

風雅を好んだ細川忠興(三斎)と、その嗣子で熊本藩細川家初代藩主の細川忠利の思いを今に伝える、二つの窯元を訪ねました。

文=福永和子

写真=下曾山弓子



CONTENTS

- 01 VISIT KUMAMOTO特集
殿様が愛した
焼き物
江戸時代、熊本藩の保護の元で発展した焼き物を特集。八代市の高田焼、荒尾市的小代焼のそれぞれの窯元を巡ります。
- 08 熊本・ひと・モノ
風雅な武士の美学を象=かたどり
嵌=はめる
肥後象嵌
肥後象嵌士・稻田憲太郎
- 10 阿蘇くまもと空港のうまかもん・みやげもん
熊本のおいしい食材を使った3階レストラン街のグルメ。各店スタッフのイチオシお土産をラインナップ。

- 12 熊本から行く
ディープな沖縄
阿蘇くまもと空港からANAを利用して行く沖縄の旅。ディープな魅力を放つ、沖縄市を紹介します。
- 13 阿蘇くまもと空港情報
ターミナル情報・information
交通情報
裏表紙 … 阿蘇くまもと空港フロアガイド

VISIT KUMAMOTO 2019春号(2019年3月1日)
発行=熊本空港ビルディング株式会社
「VISIT KUMAMOTO」編集室
熊本県上益城郡益城町大字小谷1802-2
TEL.096-232-2311(企画営業課)
FAX.096-232-2500
<http://www.kmj-ab.co.jp>

表紙制作=「阿蘇くまもと空港」のキャラクター「あそらくん」とくまモンが童話の世界を旅するシリーズ。春号は「花咲かじいさん」。物語の中に登場する正直おじいさんをイメージした、「人を慈しみ愛し、多くの人に喜ばれることをしましょう」というメッセージが込められています。熊本在住の楠田諭史氏の作品。
©2010熊本県くまモン

「阿蘇くまもと空港」の愛されキャラクター
「あそらくん」

こねる (訳)ひねる

「こねる」は、土をこねる、理くつをこねる、だだをこねるといった使い方がされます。熊本弁では手首や足をひねったときに使います。

例
あいたしもた。階段ば踏みはずして、足ばこねてしまもた。
(訳)おつとしまつた。階段を踏みはずして、足をひねつたときには使います。

つめる (訳)鍵をかける

「つめる」は、重箱に詰める、計画を詰める、根を詰めることを「つめ」といいます。熊本弁では、鍵をかけることを「つめ」と言います。

例
あわててひとつ出たけん、玄関ばつめ忘れてしまもた。
(訳)あわてて飛び出したから、玄関の鍵をかけ忘れてしまつた。

しきる (訳)できる

「しきる」は、取り仕切る、区切りをつける、部分に分けるなどに使われますが、熊本弁では「…することができる」ということを「しきる」と言います。

例
そがん簡単なつなら、だうでんしきるばい。
(訳)そんな簡単なことだったら、誰でもできるよ。



これまで本誌で紹介してきた熊本弁の中から、NHK大河ドラマ「いだてん」にも登場した熊本の方言を紹介します。※例文は本誌のオリジナルです。



◆あたが言ったごつ、まっぽしだつた
(訳)あなたの言ったとおり、ずぱりで
あどなんでもかんでも、中途半端じや
(訳)なんでもかんでも、中途半端じや
いけないよ

◆走りすぎたけん、足袋(靴)のあどんとこ
(訳)走りすぎたので、足袋(靴)のかかとの部分がすり切れてしまった
あとせき
(訳)部屋を出るときや、びしゃつとあとせきばしてはいよ
「走りすぎたけん、足袋(靴)のあどんとこ
(訳)走りすぎたので、足袋(靴)のかかとの部分がすり切れてしまった
あとせき
(訳)部屋を出るときには、きちんと後閉
めをしてください
「たまがる
(訳)大都会東京はどこでんなんでん、たま
がるこばかり
(訳)大都會東京はどこでも何でも、びっ
くりするこばかり
「こんな子は、あとからとつけむにやー大物に
(訳)この子は、将来どんな、大物になるよ
めなるばー」



器の角度などに応じ、道具を使い分けます

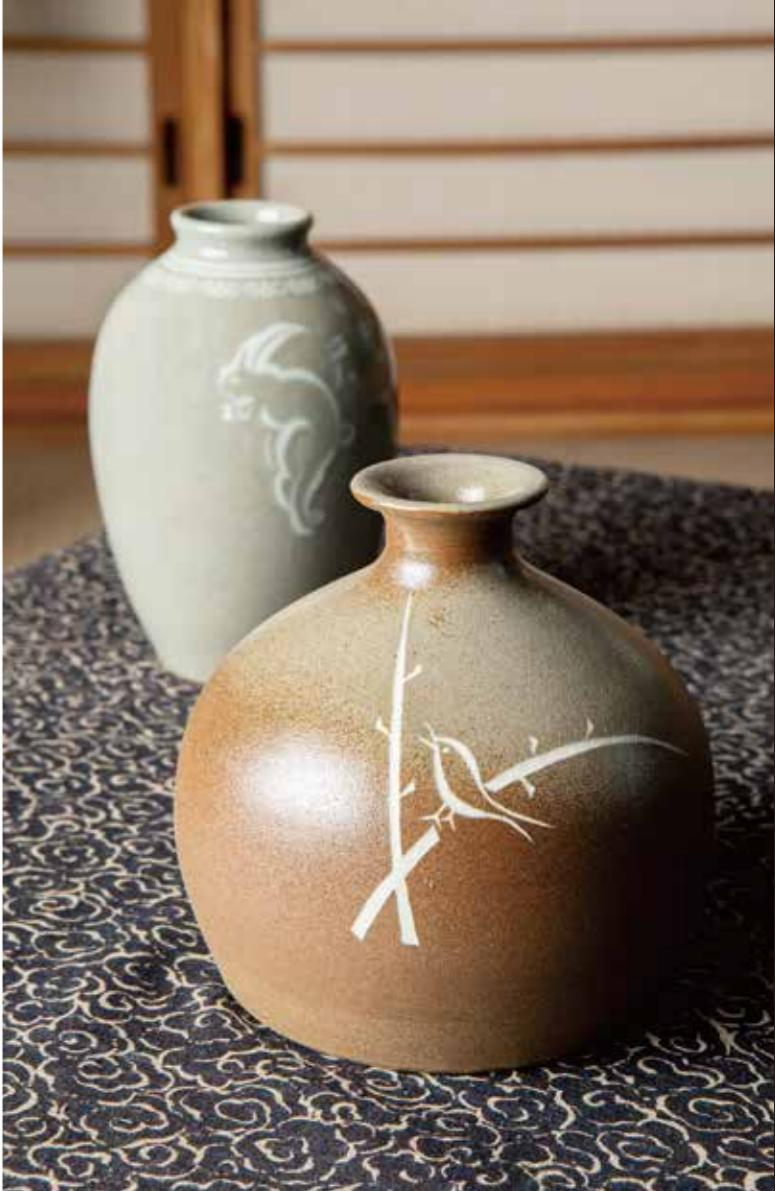


埋め込んだ文様を出すため、表面を削り落とします



左から焼き締め、青磁、黒高田の酒杯

殿様が愛した焼き物



春のウゲイス、秋のウサギ。白い象嵌(ぞうがん)が施された高田焼の花入

器の角度などに応じ、道具を使い分けます
守り継がれている「青磁象嵌」の技法
が主流となつたと言われています。そ
れと上野家は名字帯刀を返上し、仏
門に入った時代もありました。
3代の忠兵衛の時代に、現在まで
守り継がれていた「青磁象嵌」の技法
が主流となつたと言われています。そ
れと上野家は名字帯刀を返上し、仏
門に入った時代もありました。

3代の忠兵衛の時代に、現在まで
守り継がれていた「青磁象嵌」の技法
が主流となつたと言われています。そ
れと上野家は名字帯刀を返上し、仏
門に入った時代もありました。

3代の忠兵衛の時代に、現在まで
守り継がれていた「青磁象嵌」の技法
が主流となつたと言われています。そ
れと上野家は名字帯刀を返上し、仏
門に入った時代もありました。

名しています」

三斎は「わび茶」を完成させた千
利休の高弟で、「利休七哲」の一人で
焼の茶碗をとても気に入つていてと
いわれています。三斎がこの世を去
ると上野家は名字帯刀を返上し、仏
門に入った時代もありました。

400年以上も続く上野窯。その歴
史を守り続けるのが、12代当主の上
野浩之さん(62)です。

「朝鮮から日本に渡った先祖たちは
は、無理やりに連れて来られたのでは
なく、当時、茶の湯が武士のたしなみ
とされていた日本で、高い技術を駆
使し名品を制作することで期待に応
え、名をあげようという気概があつた
のではないかと思います。それにより
尊楷は細川三斎という、素晴らしい
主君に恵まれたわけです。その後、名
字帯刀を許され、上野喜蔵高国に改
名しています」

尊楷が窯を開いてから今日まで、
400年以上も続く上野窯。その歴
史を守り続けるのが、12代当主の上
野浩之さん(62)です。

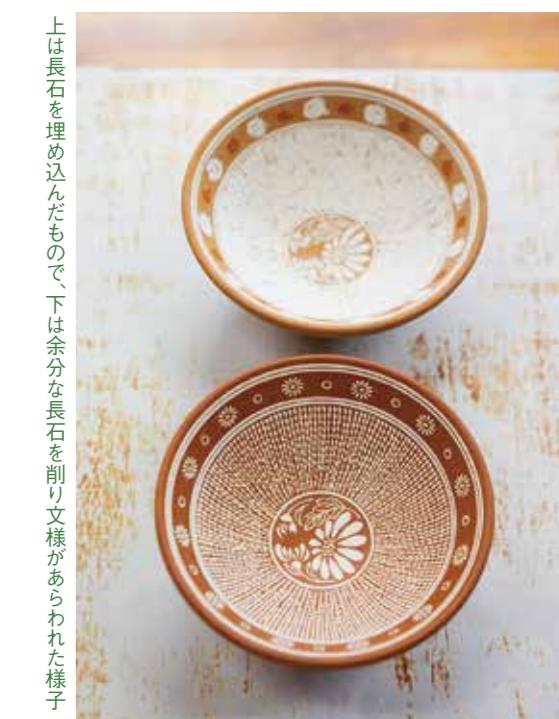
高田焼の始祖は、朝鮮半島から日
本へ渡った陶工・尊楷。豊臣秀吉の朝
鮮出兵(文禄の役)の際、加藤清正に

淡い灰青色の青磁に白い織細な文
様が施された、その独特のたたずまい
の高田焼。端正で美しい気品に満ち
ています。

高田焼の始祖は、朝鮮半島から日
本へ渡った陶工・尊楷。豊臣秀吉の朝
鮮出兵(文禄の役)の際、加藤清正に

高田焼 上野窯

八代



前・小倉の領主となつた細川忠興に
招かれ、豊前の上野釜の口に開窯した
といわれています。その後、忠興は三
男の忠利に家督を譲つて隠居、出家
して「三斎」と名乗りました。

1632(寛永9)年、肥後・熊本
の領主加藤家の改易に伴い、細川家
は肥後転封を命じられます。忠利が

城に居を移します。尊楷は三斎に従
い、高田の奈良木(現八代市奈良木
町)に開窯したと伝えられています。

尊楷の子どもたちは三家に分か
れ、代々藩のご用窯として庇護を受
け、茶陶器を中心とした作陶に従事
しました。

従い1590年ごろ(天正年間)に
来日したといわれます。1600(慶
長5)年に起きた関ヶ原の戦い以後、
天下が平定され、各大名の知行地が
決まるごとに陶工たちは各地の大名に
仕えることになります。

尊楷は1602(慶長7)年に、豊

高田焼 上野窯

前・小倉の領主となつた細川忠興に
招かれ、豊前の上野釜の口に開窯した
といわれています。その後、忠興は三
男の忠利に家督を譲つて隠居、出家
して「三斎」と名乗りました。

1632(寛永9)年、肥後・熊本
の領主加藤家の改易に伴い、細川家
は肥後転封を命じられます。忠利が

城に居を移します。尊楷は三斎に従
い、高田の奈良木(現八代市奈良木
町)に開窯したと伝えられています。

尊楷の子どもたちは三家に分か
れ、代々藩のご用窯として庇護を受
け、茶陶器を中心とした作陶に従事
しました。

話を聞かせていただいた、12代当主の上野浩之さん



話を聞かせていただいた、12代当主の上野浩之さん



高田焼の土。いくつの工程を経て出来上がります



日奈久で取れる赤土を水に濾(こ)す作業を繰り返す

半乾きの素地に竹べらや押印など
によって、曲線の文様や絵柄を彫り
込み、そのへこみに長石(白磁器の陶
石)を埋め込みます。長石が乾いた
ら、表面が平らになるように削りま
す。それから素焼きをし、釉薬をかけ
て本焼きの作業に移るわけです。

1個のものを手掛けるのに多くの
手数と長い時間を要します。ゆえに、
だそれだけに、完成した作品の肌の
なめらかさや奥ゆかしさたゞまい
は、人の心を引き付けます。

上野家に残る「指図書」 細川三斎の美意識を今に伝えて

上野窯の特徴のひとつが、細川家の家紋の一つの「細川桜」にちなんだ「桜花文」の象嵌文様。これは上野窯が藩のご用窯だったことを伝える証でもあります。

「桜花文をかたどる印判は、代々大切に受け継がれています」と浩之さんに見せてもらったそれは、長年使われてきたことを告げるかのように、木肌が飴色の艶を放っていました。

上野家には熊本藩から渡された「指図書」が残っています。藩の絵師が書いた図案で、器の形や象嵌の文様などが細かく指示されています。

「これは幕末のものです、おそらくその前の時代にも、こうした指図書

が渡されていたと思います。殿様がお気に召さない時は作り直しを命じられることがあり、大変厳しい技術が求められたということが文献にも残っています」

梅、竹、蘭、牡丹、菊、吉祥などなど、繊細でいて華麗な文様をかたどった指図書の図案に、しばし見とれてしまいます。

「時代に合わせて求められる器の形も変化してきましたが、我々の根っこにあるのは、これからも伝統を守り伝え、つないでいくことです。11代の父（才助氏）は昔気質の陶工で、古典に重きを置いてきました。父が歩ってきた道が、年齢を重ねた今、私もようやく分かるようになりました。跡を繼ぐ長男の浩平（40）も古典がベースですが、彼の感性を表現した新作にも取り組んでいます」と浩之さんは話します。

茶席で用いられる浩之さんが手掛けた渾身の水指は、武士の茶にふさわしい凜とした気品が漂っています。そこには今も、細川三斎の美意識が息づいている気がしました。



浩之さん渾身の作品、茶席の水指

小代焼 ふもと窯

取材に終始、笑顔で対応していただけた井上泰秋さん



ドーン、ドーン、ドーンと、ゆっくりと唐臼の音が響く唐臼小屋



「ふもと窯」の登り窯。2カ月に1回ほど窯入れが行われます



井上泰秋さん(77)の「小代焼ふもと窯」

昔ながらの作陶に こだわって

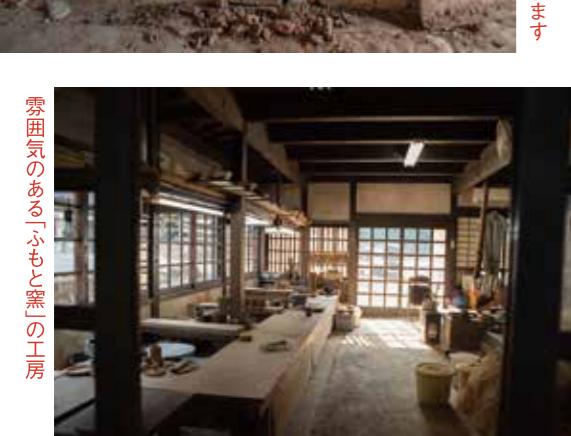
福岡県との県境に近い荒尾市。小岱山で産出される小岱粘土を使った焼き物が「小代焼」と呼ばれています。小代焼は江戸時代から続く熊本の伝統的な焼き物で、鉄分の多い土を使つた素朴で力強い作風が特徴。山の麓には12の窯元が点在していますが、その中で小代焼の大家とされるのが、井上泰秋さん(77)の「小代焼ふもと窯」です。

窯元は、広い敷地にたたずむ、重厚な日本家屋。入り口近くには、一般の人たちが、立ち寄ることができるギャラリーショップがあり、右手の小高い場所に仕事場があります。

井上さんは毎朝8時30分に仕事場に入り、いつも席に座つてろくろを回します。「今やつてるのはね、『水引き成形』というもんでね、ろくろを回して土を水で濡らしながら形を作っていくんですよ」。そう言いながら、あれよあれよという間に、いくつもの器を成形していきます。

唐臼小屋。なんと、ここでは釉薬となる原料が作られています。焼いて乾かしたワラ灰を、山からの水を利用し、唐臼と呼ばれる道具でつきます。それを水でアクリバキをして乾燥させると、釉薬の原料となるワラ灰が出来上がるというわけです。

こうして井上さんは、昔ながらの登り窯を使い、伝統に忠実な作陶を守り続けています。



雰囲気のある「ふもと窯」の工房



「ふもと窯」の登り窯。2カ月に1回ほど窯入れが行われます



上／「桜花文」をかたどるための印判
左／穏やかな物腰の上野さんですが、作業に取り掛かると厳しい表情になります



指図書をもとに意匠を加えた器



日奈久温泉街の東にある「高田焼上野窯」



問い合わせ

高田焼上野窯
熊本県八代市日奈久東町174
TEL.0965-38-0416
営/9時~18時 休/不定

[阿蘇くまもと空港からのアクセス]
●公共交通機関…空港リムジンバスを利用してJR鹿児島本線の八代駅で下車し、肥薩おれんじ鉄道に乗り換え、日奈久温泉駅で下車、徒歩8分。
●自動車…県道36号(第二空港線)を益城熊本空港ICへ、九州自動車道を利用し鹿児島方面へ。八代ICで南九州自動車道へ進む。日奈久ICで降りて数分で到着

小代焼の始まり

小代焼の始まりは、1590～1632年ごろとされ、始祖については諸説あります。一つは、加藤清正に従い来日した朝鮮の陶工、韋登新九郎が加藤家のご用窯として茶器を焼き始めたという説。

もう一つは、加藤家改易の後、熊本藩主となつた細川忠利に従つた、北小路家初代源七、葛城家初代八左

衛門が小岱山の麓で窯を開き、藩がそれらを保護したという説です。

小代焼は藩のご用窯として茶器も作られましたが、日用の雑器なども数多く作られています。そうして人々の間に日頃使いの陶器

が広まることで、食事や台所道具などの衛生面が向上してきたのではな

いでしょう。

小代焼の代表的な技法に「打ち掛け



井上さんが初めて手掛けた、蒔絵掛けという技法で作られた作品

「ふもと窯」では日頃使いの器も作られています



井上さん渾身の打ち掛け流しの大壺

井上春秋さんが、陶芸の道を志したのは、16歳の時。学校の先生から勧められて、熊本県工業試験場窯業課に進みました。

「若いころはね『芸術作品を手掛けた作家になりたい』という夢があつて、前衛的な作品を作りたいと思っていました。けどね、人生とは面白いもので、ある人の出会いが自分の人生を変えたんです」

民芸の美学こそが小代焼の原点

それは1965(昭和40)年、「熊本国際民藝館」(熊本市北区龍田1丁目)のオープンのこと。井上さんは、知り合いから頼まれて作品の展示を手伝いました。そこで出会ったのが、民芸運動家で同館の初代館長の外村吉之介氏(1898～1993)でした。外村氏は、大正時代の民芸運動の思想的指導者だった柳宗悦氏に共鳴した人物でした。



ギャラリーショップで購入することができる小代焼。安価なのもうれしいところです



「ふもと窯」の敷地に咲いたロウバイ



「またね、気をつけて帰ってね」と笑顔で見送ってくれた井上さん



小岱山の麓にある「ふもと窯」

問い合わせ

■小代焼ふもと窯
熊本県荒尾市府本古畑1728-1
TEL. 0968-68-0456 営/8時30分～18時
休/ギャラリーショップは無休、仕事場は火曜休



●公共交通機関…空港リムジンバスを利用してJR熊本駅へ。JR鹿児島本線(福岡方面)の荒尾駅で下車。レンタカーを利用して約25～30分
●自動車…県道36号(第二空港線)を益城熊本空港ICへ。九州自動車道を利用し福岡方面へ。菊水IC、南関ICから車でそれぞれ約25分

「オープン前の記念館の室内に民芸品を並べていくと、外村先生はそれぞれの作品の前に座って、『いや、いやねえ！ 素晴らしい！』と感嘆されるんです。当時の私には民芸の良さが分からなくてね。その後、先生の肩越しに作品を見るようになつてから、その素晴らしさが理解できるようになつたんです。『民衆的工芸』『民芸』は、人の暮らしを豊かにさせるもの。例えば一つの器とて、日々の食事をおいしく感じさせてくれるのだと」

外村氏が井上さんに伝えたものは「作り手が使い手に寄り添つた物を作るには、その物の性質をよく知る」ということでした。

「例えば、竹細工に使う竹にも切る時期があるわけです。5～6月の竹は切つてはならない。それは地下の

水分を吸い上げて命を輝かせる時期だから。長持ちさせる道具を作るためには、10月を待つて切る、というようですね」

小代焼を作り続けておよそ50年。「普段から、人々が手にして使う物を大切に作つていきたい」という井上さんの言葉には、小代焼の原点を教えられたような気がします。そして現在、井上さんは「熊本国際民藝館」の館長も務めています。

井上さんとの時間は、あつという間に過ぎました。帰りしな、敷地の庭に咲くロウバイを見つけました。「ロウバイは梅の仲間ではないのに『蠟梅』と書くんだよね。面白いね」と言つて、少年のように笑つた井上さんの笑顔に癒やされたのでした。

風雅な武士の美学を

象嵌さうがんかたどり

肥後象嵌ひごぞうがん

はめる



熊本・ひと・モノ

Made in Kumamoto

肥後象嵌士・稻田憲太郎



上/笑顔がさわやかな、肥後象嵌士・稻田憲太郎さん
左/作業に使う道具は、全て手作りするそうです

魚をあしらったベルトのバックル

黒

い鉄地に浮かび上がる
美しい金銀細工。400

年以上の歴史を持つ「肥後象
嵌」は江戸時代に熊本藩の保
護を受けて発展した伝統工芸

です。

風雅を好んだ細川忠興(三
斎)は腕のいい鍛冶職人を召し
抱え、その技を競わせました。

当時の武士たちは刀の鐔(つば)や武
具に象嵌細工を施し、愛でてい
たといわれます。

守る象嵌士の一人が、稻田憲
太郎さん(42)です。大叔父が
象嵌士だったこともあり、幼い
ころから肥後象嵌の世界に触
れて育ちました。

「子ども心に、自分が作った

物が人に喜ばれる、こんな素晴らしい仕事はないと思いま
した」と話す稻田さんが象嵌士
を志したのは19歳の時。現在の
肥後象嵌界を牽引する河口知

明氏に師事し、27歳で独立しま
した。

「この世界は、一本立ちする
までは大変ですが、一度だって
やめたいと思ったことはなかった
ですね」と振り返ります。

男性ファンからのリクエストが
多いのが、刀の鐔をモチーフにし
たピンバッジ。ジャケットの胸に
重厚感が漂うと、人気を集めています。

「お客様と作品を考えながら、伝統工芸と一緒に楽しんで
もらえたたらと思います」と話す
稻田さん。そのすがすがしい笑
顔に引かれ、いつぶんファンにな
りました。

鉄地に鑿(たがね)を当て、やすり
のように細かい切り目を入れる
業の仕事



魅力を次世代に伝えようと、地
元の小・中学校で体験教室を開
いたり、国内外でワークショッ
プを開催するなどの活動に積
極的に取り組んでいます。

● 稲田憲太郎プロフィール
1976年熊本市生まれ。高校卒
業後、同市の米野美術店で修業。
肥後象嵌士・河口知明氏に師事
し、2004年に独立。08年に西部
伝統工芸展入賞。同市在住
熊本市西区河内町岳1844-241
TEL: 090-17380-3862
MAIL: higozougan@gmail.com
■ 取材協力=熊本県伝統工芸館
TEL: 096-324-4930

